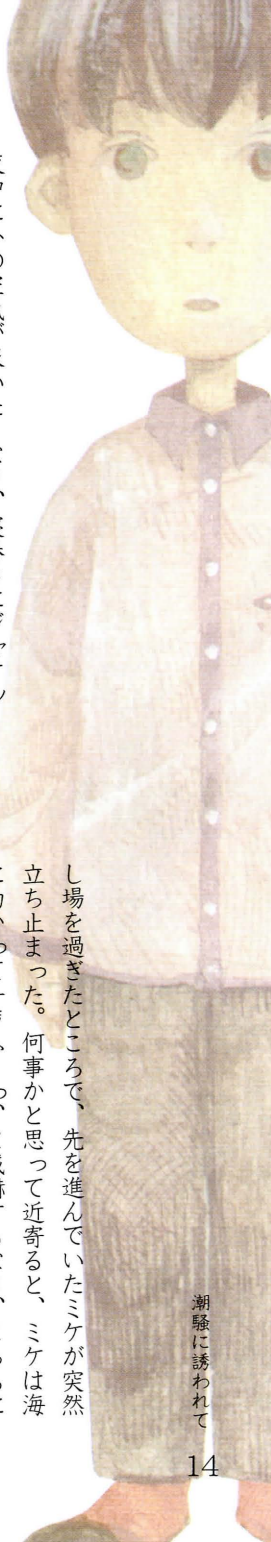


● 潮騒に誘われて



黒田直樹

絵本



夜中に外の空気が吸いたくなり、寝巻きにジャケットを羽織って、ふらりと出かけた。小さい頃から、毎晩のように散歩に出ているので、親を起こさずに抜け出すのは簡単である。いつの間に起きたのか、猫のミケもついてきていた。

ぼんやりと街灯のともった商店街を抜けて駅に出た。日中はバスでいっぱいなのロータリーも、今はがらんとしている。海の傍の柵にもたれかかって、尾水道と呼ばれる向こう岸との間にある海を見ながら、しばらく夜風に当たっていた。どのくらいこの時間が経っただろうか。ミケがいいかげんに帰れと言わんばかりに、にやあ、と鳴いたのでおとなしく従うことにした。今度は尾水道を右手に見ながら海岸通りを通って帰ることにした。はやく帰りたいのだと言わんばかりに、ミケは防波堤に飛び乗り、さっさと進んでいく。目の前で尻尾が揺れているのが見える。波止場のコンクリートの冷たさが伝わってくるようだ。二つ目の渡

し場を過ぎたところで、先を進んでいたミケが突然立ち止まった。何事かと思つて近寄ると、ミケは海に向かつて一声ふーっ、と威嚇するなり、こちらに飛びついてきた。仕方なしに抱きかかえる。なんなのか訊いてみても不機嫌そうにそっぽを向いたままである。

ふと、どこからか笛の音が聞こえてきた。和楽器のような音だ。今どき風流だと思う。誰かが練習しているのかと見回しても人影ひとつない。うっかりすると眠りこんでしまいそうなくらい、優しい音だ。ミケがせかすようにカリカリとひつかいてくるので、足を速めた。笛の音が遠のいていく。家に着いても、耳をすませばまだ聞こえてきていた。

翌日になって、気になって母に訊いてみると、ひざの上のミケをなでながら、昔祖母から聞かせてもらったという話を聞かせてくれた。あとで夜に抜け出したことをこつてりとしぼられたのは言うまでもない。

むかし、みおというおとこのこがいました。

彼はひっこしてきたばかりで、なかなか友だちがで  
きず、いつも海を見ながら泣いていました。海の波音  
が泣き声をかき消してくれ、不思議と安心できたから  
です。

きょうも海に向かって泣いていると、うしろから声  
が聞こえました。

「おまえ、なんでいつも泣いているんだ」

ふりむくと、おなじくらしいの年のおとこのこが立っ  
ています。海と同じ色の甚平を着ていました。髪が長  
くて、目が隠れており、その髪の中から水をしたたら  
せています。

「なんで、泣いてるんだ」

みおはこたえます。

「みんながぼくをよそものだつていじめるんだ」

「なんだ、それくらいで。お前がいつも泣いていると、  
おれが眠れないんだ」

「だつて……」

「ああ、もう。わかった。おれがなんとかしてやるよ。  
だからもうここで泣くな」

そういうと、おとこのこはどこかへいつてしま  
いました。水のあとが点々と残っています。

次の日のことでした。

いつものように、みおは輪に入れず、遠くから他  
の子たちが遊ぶのを眺めていました。すると、その  
中の一人が海に落ちてしまいました。周りの子たち  
はただ慌てるばかりです。みおも見ていることしか  
できませんでしたが、突然誰かに背中を押され、海  
に落ちました。何が起ったのかわからないでい  
ると、「いいから、泳げって。沈まないからさ」と、声  
が聞こえました。その言葉の通り、みおは潮に流さ  
れることなく、すいすいと溺れた子のところへ辿り  
つくことができました。岸に戻るときになると、潮  
が押しつけて、簡単に上がる事ができました。  
呼ばれて駆けつけた親に感謝され、子どもたちも仲  
間はずれにしていたことを謝りました。

以来、彼も遊びに加えてもらえるようになりまし  
た。あのおとこのこが助けてくれたのだと、みおに  
はわかりました。

おれを言おうと、以前の海辺で待っていると、また後ろから声が聞こえました。

「どうだ、なんとかなっただろ」

ふりむくと、例のおとこのこが立っていました。前と同じように、水をしたたらせています。

「うん、みんな、遊びに入れてくれるようになったんだ。ありがとう」

「おれはいいから、もうここで泣いたりするんじゃないぞ」

それだけ言うと、おとこのこは走っていきましたが、すぐにもどってきました。

「おまえ、泣きむしだからな。こまったことがあつたら海にむかつてこれを吹くんだ。いいか、ぜつたいに泣くなよ」

貝か珊瑚で作ったような横笛でした。太陽の光が照り返して、わずかに光るのがきれいです。

「そうだ。きみ、なんていうの」

みおはまだ名前を聞いていなかったことを思い出し、たずねました。

「おれか。おれは、みなど」



「へえ、へんな名前」

「うるさい。おんなみみたいな名のやつに言われたくねえや」  
夕日を背に、ぬれた髪をきらめかせながら、みなどは答えました。

その日から、みおは泣かなくなり、かわりに笛を吹くようになりました。そのたびにみなどはあらわれて、そうだんにのっけてくれ、なんとかしてくれました。何度か助けてもらいうちに、二人は打ちとけて話すようになりました。

海を見ながらみなどとはいろいろなことを教えてくれました。海も生き物であること。海の面倒をみる自分が自分の仕事であること、波のようすで、その日の機嫌がわかること。凧でいる日は海が寝ていること。

みおも、自分のことを話しました。家族のこと、海を見ていると安心すること。笛で吹けるように、曲を覚えていること。

みおは毎日のように、波止場で笛の練習をしました。その傍らには、みなどがついていて、聞き入っていました。



ふだんのおだやかなようすと違い、海が荒れている日のことでした。

みおはいつものように笛を吹きました。みなとがあらわれて、ききました。

「どうしたんだ、こんな日に。危ないから家に帰ってろ」「りょうしの人たちが言ってたんだ。大きな波がくるんでしょ？ どうしよう。みんなの家が水びたしになっちゃうよ」

いいおえると泣きだしてしまいました。

「だから、泣くなって」

「でも……」

少しかんがえると、みなとは言いました。

「わかった。なんとかしてやる。だから今すぐ家に帰れ」

「えっ、どうやって」

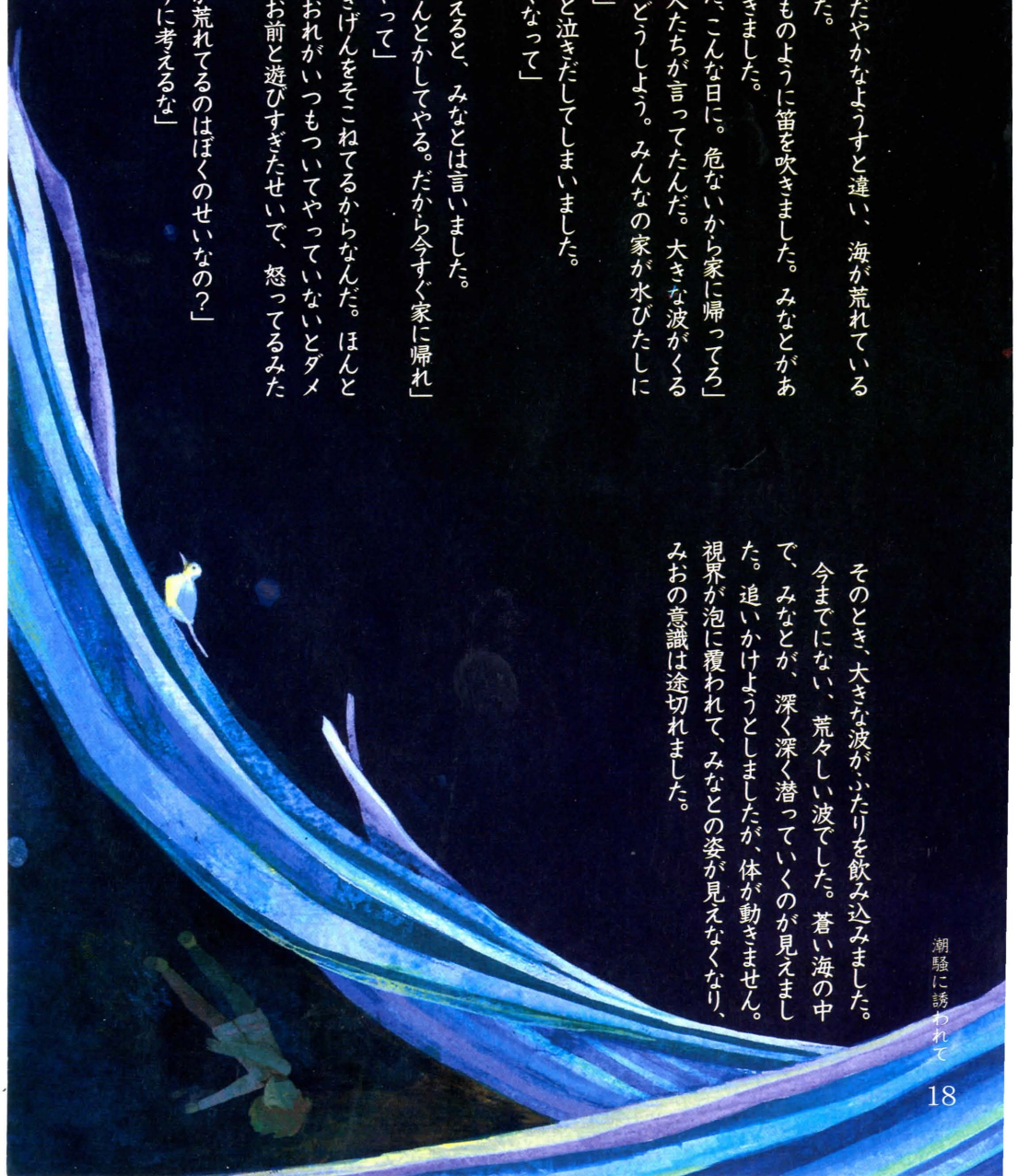
「それは海がきげんをそこねてるからなんだ。ほんとうは海守りのおれがいつもついてやっていないとダメなんだけど。お前と遊びすぎたせいで、怒ってるみたいだ」

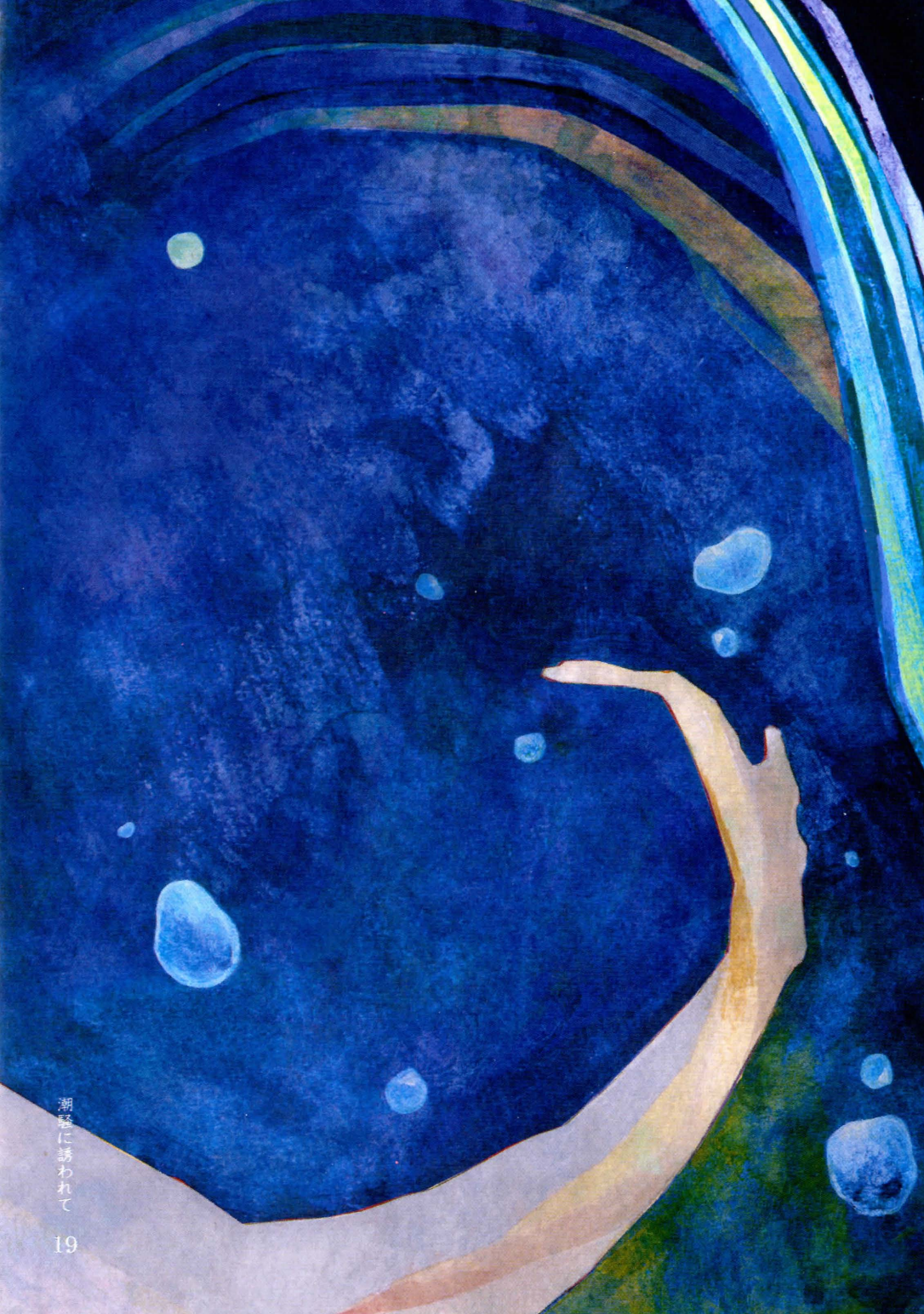
「じゃあ、海が荒れてるのはぼくのせいなの？」

「そういうふうに考えるな」

「だって……」

そのとき、大きな波が、ふたりを飲み込みました。今までにない、荒々しい波でした。蒼い海の中で、みなとが、深く深く潜っていくのが見えませんでした。追いかけてやりましたが、体が動きません。視界が泡に覆われて、みなとの姿が見えなくなり、みおの意識は途切れました。







気がつくど、彼は笛といっしょに砂はまにうち上げられていました。

海はいつものように穏やかになっています。みなとが鎮めてくれたようです。

みおは笛を吹きましたが、音はむなく水面に消えていきました。

それからというもの、あのときのように海が荒れる日はなくなり、穏やかな日が続きました。

ですが、みおがあれからいくら笛を吹いても、みなとはもうあらわれてくれませんでした。きっと海につきつきりなのでしょう。

それから月日は流れ、泣き虫だったみおは、たくましい漁師になりました。

船で海に出るようになると、なんとなくですが、その日の海の機嫌がわかるようになりました。そこで、海が寝ている日、凧いでいる日に笛を吹くようにしました。

あれからいくつも曲を覚えたこと、漁師になったこと、元気でいることが伝わるように。

みおが亡くなると、彼の遺体は笛と一緒に葬られました。

以来、笛を吹く人はいなくなりましたが、今日のような、尾道水道が凧いでいる日には、どこからか笛の音がきこえてくるのだといいます。

きっと、みおがみなとと遊んでいるのでしょう。海に気をつかって、寝ているあいだにだけ。



途中で寝てしまったのか、ミケが母のひざの上で気持ち良さそうに眠っていた。

外に出て、波止場から海を眺めてみた。今日も昨日と同じように穏やかだ。まだ海が眠っているのだろう。

いつの間にか起きてきたのか、ミケが置いていくほどばかりに、足をカリカリひつかいている。よほど気に喰わなかったようだ。爪に入る力が強い。

世話係ってのは大変だよな。そう思ってミケを抱き上げた。

波の音に混じって、笛の音が聞こえたような気がした。





潮騒に誘われて